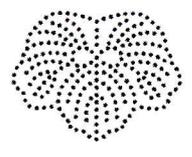


「あした死ぬ幸福の王子」は高野の分身がお客様のところへ挨拶に向う。という気持ちでお届けしたい。



# リゅうま伝

59号  
2024年10月26日  
高野 竜馬

「あした死ぬ幸福の王子」

「あなたは明日死ぬかもしれませんが、そんなことを言われたら、どうしますか？ 傲慢な王子が余命一ヶ月と宣言されることから始まる物語。」

ハイデッガー哲学を寓話仕立てで分かりやすく解説された本に刺激を受けた高野です。実はこの余命宣告の体験学習をしたことがあります。終活の第一歩を踏み出して頂くために作られた相続診断協会の「エンディングノート作成セミナー」です。いくつかの質問に答えていくと、終活への抵抗感が減り、エンディングノートに取り掛かりやすくなります。その中の最後の質問が次のものです。

「あなたの命はあと一年と余命宣告されました。一年のうちどのくらいをやりたいことを書いてください。」

3つ書き上げるとグループ内で討論します。当時(10年以上前)、参加者の多くが営業職だったからか、余命宣告されたらお世話になったお客様に御礼を言っておきたいという人が多くて驚きました。

趣味や家族のことばかり書いた自分が、なんとも恥ずかしく思えたものです。

また他人の発表を聞いてみると「余命宣告されなくなると、そんなの今すぐおれは良いじゃないか」という思いも湧いてきます。私含め多くの人が今できていることを先延ばしに生きていくことを気づかせてもらいました。

そして今回の読書を終えて、久しぶりにエンディングノート作成セミナーの資料を見直すと、更に驚いたことがあります。

それは余命宣告を受けて一年以内にやりたいこと、今は今ではさほど関心のないもの、ということでした。

死を意識して「死ぬ前にこれだけはやっておきたい」と思っても、それは案外、薄っぺらなものだったのです。

かのS・ジョブズも「もし今日が人生最後の日だとしたら、今日やるうとしていくことを本当にするだろうか？」を問い、違うという答えが続くようだった。何かを変えなければいけないと言っています。

「あした死ぬ幸福の王子」も余命宣告され、「死」を意識したことで、人生を見つめ直し、かけがえのない自分に気づきます。誰とも交換不可能な自分に気づくのです。

そして自分を大切に思えば思うほどに、かけがえのない他者にも気づき「本来的な生き方」にたどり着くのです。

仰々しく思われるかもしれませんが、今、世界各地で広がる紛争も死生観を見直すことで減るのではないかと思わせてくれる一冊です。

最後に心に刺さった一文を。仮にこの世から死がなくなり無限に生きられるとしたら、人は自分の人生を真剣に考えたりはしないだろう。



たかの財形事務所  
〒819-0374 福岡市西区千里 707-13  
☎090-3407-2123  
<https://www.takanozaikai.com> メール [fp.takano@gmail.com](mailto:fp.takano@gmail.com)